

MOVE the NEXT動かす、次代。広げる、未来。>

JIMHニュース

第9号

2023年新年賀詞交歓会

機種別部会・合同見学会

機種別部会・全体勉強会

統計調査報告

第12期マテハン塾 発表会&修了式

新入会員企業紹介 イベント出展案内

3年ぶりの賀詞交歓会を盛大に開催、 経産省・国交省の来賓から揃って祝辞も



1月24日(火)、(一社)日本物流システム機器協会の新年賀詞交歓会が、東京會館大手町LEVEL21(東京都千代田区)にて3年ぶりに開催されました。会では冒頭、下代会長が登壇し、以下の要旨で挨拶されました。

新たな物流創出の期待に応えるべく邁進

本日は、実に188名という大勢の皆様にお集まりいただいたことにまず感謝申し上げます。経済産業省、国土交通省はじめ皆様のご臨席を賜り、日本物流システム機器協会として、3年ぶりに対面での賀詞交歓会を開催できたことに安堵しています。



下代会長

振り返ると2022年は、ロシアのウクライナ侵攻にはじまり、長引くコロナ禍とそれによるサプライチェーンの分断、エネルギー問題に端を発する物流費その他原材料等の高騰と、実に大変な年でした。

年明けからもウクライナ問題あるいは中国のゼロコロナ政策からの転換で局地的感染が広がるなどの報道もあり、その一方で国内では5月にも、新型コロナウイルス感染症の分類を第五類に変更するという政府の方針も聞こえています。医療体制等の様々な面で注意を怠ってはなりません、社会経済活動が早期に正常化することそれ自体は望ましいのではないのでしょうか。

一方足元では2024年問題が迫っており、これも物流システム機器業界の大きなテーマとして捉え、荷主、運送業者、ドライバーの皆さんが共存していくための、より高度な自動化・省力化ソリューションの提供に尽力して行く必要があります。

またESGやサステナビリティのテーマに関しては、産業構造や社会経済を変革し環境への負荷を最小化することが期待されているGX(グリーントランス

フォーメーション)の推進も必要であり、新たな物流の創出が期待される中、その期待に応えるためこれからも産業界への貢献と当協会の発展を目指し、たゆまぬ努力を続けていきます。

*

会長のあいさつの次には来賓の紹介があり、来賓を代表して経済産業省製造産業局産業機械課の安田篤課長、続いて国土交通省総合政策局物流政策課の平澤崇裕課長が登壇して挨拶、要旨は以下の通りです。

DX、GX、グローバル対応の3軸展開

昨年は、コロナ禍からの回復を図る一年でしたので、今年はさらに経済を本格的に伸ばしていく一年にしたいとの思いがあります。今年の経産省は三つの軸で政策に取り組んでまいります。



経産省・安田課長

一つ目はDXデジタルトランスフォーメーション。二つ目がGXグリーントランスフォーメーション。三つ目が経済安全保障を含むグローバルな対応です。この三つの軸を連携させながら前に進めていきます。

物流システム機器業界の皆さんはユーザーの生産現場、物流現場において、省人化および自動化のニーズに応える大きな役割果たしておられます。DXの文脈では強い物流が伸び、GXの文脈では省エネ効率の高い機器が物流現場の生産効率を最適化して行く意味でも、大きな期待が寄せられています。

またグローバルにも、貴協会は日米欧中国の四極会議を開かれ、マーケット、技術、レギュレーションといった意味で各国との連携を図っていただいております。そうした皆様の取り組みと連携しつつ政策を進めて行きたいと思っております。

ピンチを構造改革のチャンスに

今年は2024年からのトラックドライバーの時間外労働規制の適用まで1年余りと迫る、非常に重要な一年で、国交省は3本の柱で諸課題の解決に臨んで参ります。



国交省・平澤課長

一つ目はピンチをチャンスに。これは2024年問題をはじめとする物流諸課題はピンチではあるが長年続いて来た商慣習や構造を見直す絶好の機会と捉えるものです。

二つ目は価値を価格に。これは物流の提供している時間的な価値、環境面の価値、様々な価値を合理的な価格に結び付けていく取り組みです。

三つめは三方良し。これは物流コスト上昇を他の分野にシワ寄せさせると、結果として日本経済、社会が停滞することにつながることから、物流の生産性を向上させ、物流事業者という売り手、さらには着荷主、発荷主、消費者、買い手がウインウインとなるような社会を目指し、経済社会が発展する世の中を目指す姿勢を表しています。

*

来賓の挨拶に続いては、大庫良一副会長が乾杯の発声で登壇しました。挨拶の要旨は以下の通りです。

右肩上がり乾杯も3年ぶりに復活



大庫副会長の乾杯の発声

3年振りにフルスケールでの賀詞交歓会が開催できることを大変嬉しく思います。

まだまだ半導体をはじめ部品の入手困難は続いており、米中摩擦による様々な規制も出て来ている中で、2024年問題は非常に頭が痛い反面、チャンスだと思うようなことも増えています。こうした問題はただ心配するだけではだめでしょう。我々は物流を止めない企業の団体として、ますますその責任が重大になってきていると思います。

いよいよ3年振りの右肩上がり乾杯をしますが、これは結構体力を使います(笑)。それでは、足は肩幅に、左手を腰に、これでグラスを上げると自然に右肩が上がるようにできていますので、ほどほどに、かつ元よく乾杯しましょう。乾杯!!

乾杯の発声に続いて、会場では3年ぶりの和やかな歓談が繰り広げられました。

*

その後、宴たけなわの会場では、笠俊司副会長が登壇し、中締め挨拶を行いました。挨拶の要旨は以下の通りです。

本日ご列席の皆さん、3年振りにこのようなフルスケールでの開催ができ、私自身が当協会に参加して3年目ですので、本当に初めての風景を目の当たりにしています。皆さんの姿を目の当たりにして、当協会の益々の発展を確信した次第です。



笠副会長

新年のお祝いでもございますので、当協会の益々の発展、ご列席の皆様のご健康、ご健勝を祈念しまして、恒例の中締めを致したいと思います。一本で締めるというのは、締めと言いつつ次につながる、つまり始まるという意味もあるのだと以前教わりました。そういった気持ちを込めて、皆様と一本で締めさせていただきます。それではお手を拝借、……よ〜っ!

活気あるシンプルな一本締めで、今年の賀詞交歓会では中締めとなりました。

日本だから実現した競合企業同士のAGV連携ソリューションを間近に



雪の中、相模原LaaSセンターを訪問

2月10日(金)、機種別委員会の合同見学会が、会員企業である(株)ギークプラスの相模原LaaSセンターにおいて開催されました。当日はあいにくの雪に見舞われましたが、集合場所の最寄り駅からはチャーターしたバスでの送迎で、無事に現地へ定刻到着しました。

見学会は冒頭、設備系委員会委員長の藤田氏が登壇し以下の要旨で挨拶しました。

「物流システム機器協会の見学会一行をお招きいただきましたギークプラスの加藤社長に御礼申し上げます。コロナ禍の影響で、見学会をやりたいとの声はいただいているながら、なかなか開催に至りませんでした。協会としても久方ぶりの開催で、本当に絶好の機会ですので、しっかりと情報収集・交換をしていただきたいと思います」



ギークプラス加藤社長による概要説明

委員長挨拶に続いては、ギークプラス代表取締役社長の加藤氏が登壇し、会社概要及び製品概要が説明されました。要旨は以下の通りです。

「当社はよく、中国に本拠地を置くメーカーであるギークプラスの日本における現地法人かと聞かれるのですが、そうではありません。屋号こそギークプラスとしていますが、実際は中国のメーカーと日本企業とのジョイントベンチャーです。

そうした事情から、本来中国ではギークプラスとt-sort3Dの製造元であるリビアオ社はロボットメーカーという意味でコンペティターでありながら、ここ日本においては独立したジョイントベンチャー同士という立場で、マルチロボットを活用したRaaSプロバイダーのプラスオートメーションと、顧客の要望に応じて連携ソリューションを実現しています。

中国のギークプラスは2015年に設立して北京に本社を構えており、2017年には日本へ進出しています。現在日本に3か所の拠点がありまして、恵比寿の本社、印西のテクニカルセンター、そしてここ、相模原のLaaSセンターです。

取り扱う製品は主にピッキングシステムで、一部、ソーティングシステムもラインナップしますが、日本市場ではその



ギークプラスの棚搬送ロボットEVE

ニーズに沿って、P500、P800、P1200といったAGVをピッキングシステムに組み込んだ形で販売しています。既に当社のAGVを導入いただいている企業は全国で70拠点に及び、総販売台数は2,000台を超えています。

本日お越しいただいた相模原LaaSセンターにはいくつかの用途があり、その一つは荷主のソリューションを構築するための場として、我々の商材のみではなく、今回ご紹介するプラスオートメーションをはじめ、例えばRFID関連のソリューションとも連携・コラボレーションを構築し顧客へ提供する試みをしています。

AGVエリアで実機見学と作業デモ体験

スピーチに続いては、実際の現場見学に移り、最初

に従来型の棚搬送AGVエリアで実機を見学しました。

棚搬送ロボットのオペレーションでは、ピッキング作業をデモンストレーション。ステーションのモニターにはピッ



AGVエリアで見学者も作業体験

キング、棚卸、棚付のメニューが表示されこの場で作業を選択、場合によりあるステーションで入荷しながら隣のステーションでピッキングするといった作業振り分けも可能です。

一般的なオペレーションでは、入荷した商品は検品後にWMSにデータを計上、データをロボットに飛ばすと自動でロボが棚を運んできます。入荷の頻度や大きさに合わせて必要な棚が来るしくみです。

基本的な解説とデモに続いて、作業体験タイムが設けられ、我こそはという見学者が、ギークプラスの棚搬送ロボットを介したピッキング作業を実地体験しました。見よう見まねと簡単なレクチャーですぐに取り掛かることができる様子から、棚搬送のピッキング作業を画期的に容易にしてくれそうな印象がありました。

*

AGVエリアの次に訪れたのは1FのPop Pickエリア。新発売されたPopPickの特徴は、従来の棚搬送型AGVの高さ2.8mから大幅に高層化し、国内倉庫で一般的な4mの防火シャッター下をギリギリ通過



天井スレスレに迫るPopPickステーション

できる高さ3.8m(リフト状態)とすることで、格段に上部空間の利用効率を向上させたことです。

この高さになると作業者の手は届かないので、クレーンを備えた専用ステーションによってコンテナをピッカー前に並べる仕組みです。

このPopPickに併設されるのが、プラスオートメーションが取り扱うAGVを主軸に上下方向への仕分けも実現したリビアオ社のt-sort3Dです。PopPickステーションから作業者がピッキングした商品をt-sortロボットに載せると、仕分けエリアまで搬送して受け渡し、スムーズな連携で人手では困難な80もの間口に振り分けて行きます。

高層の棚からより多くの商品を引き当てるヒット率を向上させるには、仕分け間口を増やすことが効果的ですが、これ



ピッキング商品をt-sort3DがAGV自動仕分けリレーを自動化と共に無理なく実現したのが今回のコラボレーションと言えそうです。

*

見学終了後は活発な質疑応答が行われ、次いで情報系委員会委員長の立川氏が登壇、以下の要旨で挨拶しました。

「これから2024年問題に直面する業界で、多くの現場での課題もあると思いますが、本日の見学が皆様にとって一つの解決のヒントになったとすれば幸いです。ありがとうございました」

閉会の挨拶で当日の見学会は終了。雪の中、送迎バスで相模原LaaSセンターを後にしました。



この冬一番の降雪に見舞われ、一層思い出深い一日に

第4回 機種別部会・全体勉強会

2025年の崖を乗り越えるための切り札、DX推進の重要基盤ローカル5Gとは

5Gの3大特性、超高速・多数接続・低遅延

2022年度の第4回機種別部会・委員会が11月10日(木)に銀座ユニーク貸会議室(東京都中央区)にて開催されました。会は冒頭、横田事務局長が登壇、運営幹事会の報告等に続き、全体勉強会が開催されました。

NECデジタルネットワーク事業部門 事業戦略・プロモーション統括部 プロフェッショナル 鈴木義明氏による講演タイトルは「DXを実現! ローカル5Gで変わるネットワーク」。概要は以下の通りです。

*

「2025年の崖という言葉がありますが、これは元々経産省のレポートからの引用で『もしも今後DXを推進していかないと、2025年には最大で年間12兆円の損失につながります』という指摘でした。つまり企業にとってDXを推



鈴木氏の講演の様子

進するか否かが、今後生き残れるかどうかの境界になるということです。

その、DXを推進する基盤の一つがローカル5Gだと言えます。5Gの3大特性と言えば超高速、多数接続、低遅延で、それぞれが4Gとはけた違いに向上しているわけですが、実はこの3大特性のすべてを同時にフルで活かすのは難しいことから、実際には用途に応じて必要な要素を活かして行くのが現実的で、例えばキャリアに代表される高速大容量コンテンツであれば高速を重視、自治体の遠隔医療や自動運転であれば作業者の操作が機器に常に反映されることが重要なので低遅延を重視、という具合に使い分けることになると思われます。

ローカル5Gの定義は、キャリアではなく企業・自治体が自前で構築する5Gネットワークとされています。ネットワーク構築も企業・自治体が行い、免許も企業自治体が取得、柔軟な仕様のカスタマイズが可能



で、専用ネットワークゆえの品質が確保され、その対象も主に企業・自治体向けといった特徴があります。

5Gには大きくsub6とミリ波の周波数帯があり、それぞれの周波数帯で一定の領域(sub6: 4,600~4,900MHz、ミリ波: 28.2~29.1GHz)がローカル5Gに割り当てられています。

またネットワーク構成(RAN: Radio Access Network)の点では、5GにはNSA(Non-StandAlone)構成とSA(StandAlone)構成の2種類があり、NSAは主にキャリア5Gで使われる構成で、コアネットワークは従来の4Gコアを用い、無線アクセスの基地局にも従来の4G基地局を使いながら段階的に5G基地局に移行展開していくイメージです。

一方のSAは新規構築が基本のローカル5Gの主流で、コアネットワークも基地局も5G仕様で使えるのが特徴、5Gの3大特性が享受できます。

当社の取り組みについてですが、当社ではお客様とのオープンイノベーションの場として“NEC CONNECT 5G Lab”というローカル5G実証実験の場を用意しており、ローカル5Gもしくは他の無線規格を含めてどれが最適か、業務効率化に資するか等、新しいソリューションの検討が可能な場としています。

また当社ではsub6の一体型製品として“UNIVERGE RV1200”をリリースしました。設置しやすいコンパクトサイズ、シンプルなシステム構成、お求め安い価格帯の3つが特徴で、従来は複数の機器機材が必要だったものを一つの筐体に納めたコンパクトなモデルです。こうした点が評価され、ネットワーク系イベントのInterop2022でローカル5G部門グランプリ受賞、CEATECでも総務大臣賞を受賞する等、ローカル5G普及に一役買うと期待されています」

*

勉強会終了後は機種別委員会での会員企業紹介、個別ミーティングを経て順次閉会、解散となりました。

第5回 機種別部会・全体勉強会

MH機器保守整備にもデジタル化の波「修理リコメンデーション」と「SmartFAM」

現場技術者ノウハウを未来へ継承するために

2022年度の第5回機種別部会・委員会が1月12日(木)に銀座ユニーク貸会議室(東京都中央区)にて開催されました。会は冒頭、横田事務局長による運営幹事会の報告等に続き、全体勉強会が開催されました。

(株)日立製作所社会BU 制御プラットフォーム統括本部 サービス・制御プラットフォームシステム本部 デジタルソリューション事業開発部 主任技師 福井清純氏による全体勉強会の講演タイトルは「デジタルデータを利活用した保守・保全業務高度化について」。概要は以下の通りです。

*

「保守をとりまくメガトレンドとして、世界的に共通の生産年齢人口の減少、保守に携わるメカニックの高齢化、製品側技術の高度化といった問題があり、保守やアフターサービスの維持がより困難な時代を迎えています。日本と海外でもその背景・事情こそ異なるものの、結果としてどちらも、保守の現場で必要とされる技術者の知見やノウハウが継承されにくくなっています。



福井氏の講演の様子

製造業者の保守のトレンドでは、バリューチェーンの企画・設計から調達・製造・物流・販売・保守・アフターサービスの一連の流れにおいて、現場で得られる顧客のデータを戦略的に活用してバリューチェーン全体に波及させることの重要性が指摘されています。

デジタルデータを利活用した保守・保全業務の高度化をステップ分けしてみますと、最初のステップで業務データのデジタル化があり、次に業務データの見える化・分析、そして最後にデジタルデータ利活用と見ることができます。

現状ではどの企業も何らかの業務デジタル化は手掛



け始めているものの、そうして貯まったデータをうまく活用できていないという悩みをよく耳にします。

当社はそうしたデジタルデータ利活用のソリューションやサービスを揃えており、その一つに独自のAI技術を駆使した部品選定支援や問診・故障探求支援サービスを含めた修理リコメンデーションがあります」

*

福井氏に続いて、(株)日立産業制御ソリューションズの営業統括本部 産業営業本部 産業営業第一部 部長代理 杉山卓也氏が登壇し、講演を引き継ぎました。概要は以下の通りです。

「前段でご紹介したデータ利活用について、保守・保全データをどう集約するのかという、前提となる課題の解決に向けてご紹介するのが、当社の設備・資産管理システムのSmartFAMです。

例えば製造の現場には現場ならではのノウハウやスキルが継承されていますが、ご多分に漏れず属人的な要素が強く「この人でないと修理できない」といったケースがよくあり、生産性に影響を与えています。管理サイドを見ても、何かが起きた時の報告書作成がスムーズに進まずデータも活用できていない、との課題があり、経営層に現場の課題が見えない、という形で問題が連鎖しているようです。

そうした課題に向け保全業務のPDCAサイクルを支援し、業務を最適な方向へ導くのがSmartFAMのコンセプトで、情報を一元管理することで、例えば今納めている機器が何かだけでなく、いつ点検済で次はいつ点検か、までが常に見える化できます。

タブレットを活用し各種の手間を軽減する等の効率化、また他システムとの連携も可能なシステムの柔軟性・拡張性もポイントです」

*

勉強会終了後は機種別委員会での会員企業紹介、個別ミーティングを経て順次閉会、解散となりました。

国内マテハンシステム生産額は1.1%減の1兆3,923億円、 世界4極合計は20兆4,110億円と26.1%の激増

2021年版マテハンシステム統計調査報告書より抜粋

◆調査の目的

マテハンシステムは、物流の自動化や省力化を通じて、産業の活性化、生産性の改善や市民生活の向上に重要な役割を果たすことが期待されており、その中核を担うマテハン業界の振興には、基礎的な統計データが不可欠です。

ところが、従来利用されてきた統計は、狭義のマテハンを対象とするデータに限定されており、現実的にマテハンシステム全体の実態を把握するためにはデータが十分ではない、といった問題を抱えていました。

そこで、本調査ではそのような背景を踏まえ、関係する業界団体の協力をあおぎながら、より広義のマテハンシステムに関するデータを収集し、正確な業界の実態を明らかにすること、具体的には、4極会議（日本、米国、欧州、中国）への参加を通じて、グローバルに通用するマテハンシステム統計を継続的に調査することに加え、その結果を報告書として情報提供することを目的としています。

◆調査の範囲

本統計の調査範囲は、FEM（欧州物流機械連盟）の7つのカテゴリ分類に従っているため、物流関連の機器・システムをすべてカバーしているわけではありません。

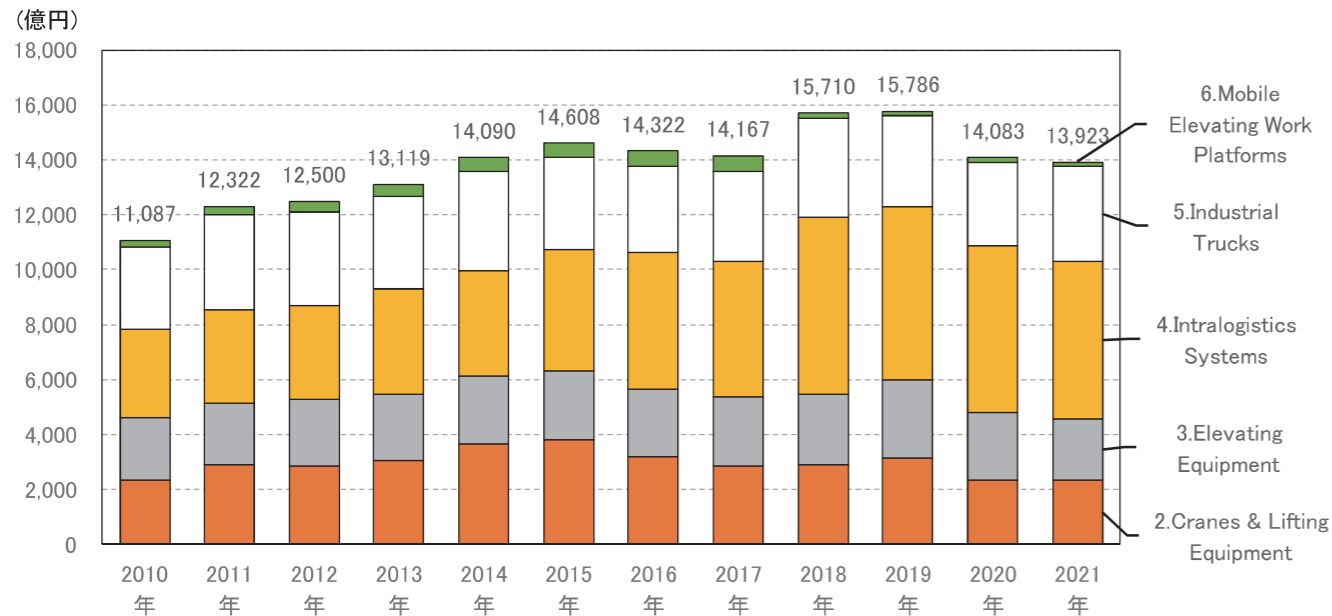
例えば、パレットやコンテナのような物流機材・輸送容器や動力のない運搬車両は含まれていません。

◆調査の期間

データの出典にある経産省「生産動態統計」については、2021年のデータとしては、2021年1月から2021年12月までの実績を調査集計したものです。

ただし、Intralogistics Systemsについては、2021年のデータとしては、2021年4月から2022年3月までの実績を調査集計した業界データで、これはJILS（公益社団法人日本ロジスティクスシステム協会）とJIMH（一般社団法人日本物流システム機器協会）の共同編さんによるものです。

図表1 1日本のマテハンシステムのカテゴリ別国内生産金額推移図



図表2 マテハン機器カテゴリ別国内生産金額推移

統計項目	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
1.Conveyors for Bulk handling	-	-	-	-	-	-
2.Cranes & Lifting Equipment	3,177	2,841	2,897	3,153	2,331	2,335
3.Elevating Equipment	2,498	2,512	2,565	2,833	2,493	2,222
4.Intralogistics Systems	4,984	4,965	6,438	6,327	6,055	5,756
5.Industrial Trucks	3,112	3,281	3,617	3,286	3,044	3,441
6.Mobile Elevating Work Platforms	550	568	193	185	160	169
7.Racking & Shelving	-	-	-	-	-	-
日本国内生産金額	14,322	14,167	15,710	15,786	14,083	13,923

(単位：億円)
(出典：経済産業省生産動態統計年報 機械統計編 及び JILS/JIMH による統計)
注：カテゴリ6「Mobile Elevating Work Platforms」は、2018年より「高所作業車」のデータが取得できない影響によって金額が減少している。

◆日本のマテハンシステムの生産額

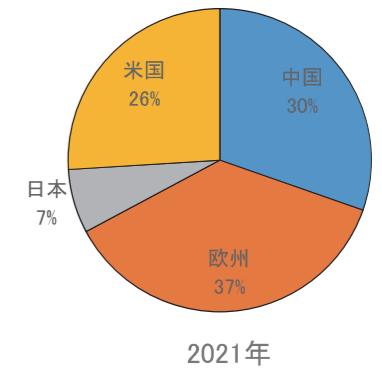
2021年の生産額は、1兆3,923億円であり、前年比1.1%の減少となりました。全体の約4割を占めるIntralogistics Systemsが4.9%の減となった一方、Cranes & Lifting Equipment、Industrial Trucks、Mobile Elevating Work Platformsは増加傾向が見られました。

◆4極のマテハンシステムの生産額

日本、米国、欧州、中国の4極の団体から結成されたWMHA (World Material Handling Alliance) では、各国のデータを持ち寄ることでグローバルな統計を作成しています。

WMHAでは、統計の分類としては4分類のカテゴリが採用されているため、先の7つのカテゴリ分類とは異なりますが、カバーするマテハンシステムの

図表3 4極の地域別シェア



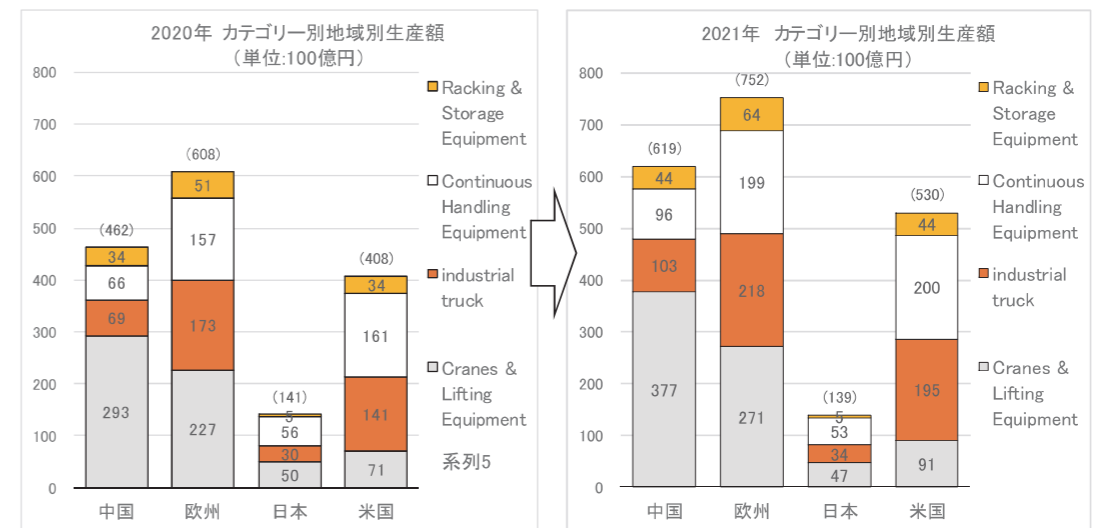
範囲は同一です。なお、欧州の2020年以降のデータは、英国の欧州連合 (EU) からの脱退の影響により、英国を含まないデータとなっています。

統計データは以下に示す通りですが、4極合計での生産額は20兆4,110億円に達しており、これは前年 (16兆1,850億円) と比べて26.1%の増加でした。

地域別に見ると、日本は前述の通り1兆3,929億円と前年比1.1%の減少でしたが、他はすべて増加を示し、中国が4兆6,210億円から6兆1,940億円へと34.0%の増加、欧州が6兆800億円から7兆5,200億円へと23.7%の増加、米国が4兆750億円から5兆3,040億円へと30.2%の増加となりました。

なお、2021年のデータとしては、日本以外の3極は2021年1月から12月までの実績を対象としています。

図表4 2020年から2021年の4極の生産額の推移



注：欧州の数値には英国を含まない。

第12期マテハン塾 発表会&修了式

業界の未来を担う全5チーム25名に JIMH下代会長が認定証を授与



互いに協力し短期間で課題に挑む貴重な経験

2月15日(水)、2022年度の第12期マテハン塾本講座(後期コース)の発表会および修了式が、AP東京八重洲(東京都中央区)会議室にて行われました。当日は冒頭、藤井部会長が登壇し、以下のように挨拶しました。

「本日の発表会と修了式で第12期のマテハン塾は最後を迎えます。受講生の皆さんは通常の業務の時間を割いて講義に参加され、また正規の時間以外にも自主的に集まって討議されたチームもあり、大変だったと思いますが、ここで出会った同士が同じテーマに取り組んだ経験は貴重だと思います。このつながりを今後も生かして業務に励んでください」

挨拶に続き、講師陣を代表して三浦氏が登壇し、発表会の課題におけるシステム構築等の条件について以下のように解説しました(タイトル写真)。

「皆さんには今回かなりハードなスケジュールで課題に取り組んでもらいました。3,000アイテムの商品を保管するセンターで、年間200億の通過規模、在庫日数8~12日で、1ケース4,000円という想定で物流施設を設計する、というものです。そのような条件で、基本的に何年で償却できるか、投資を回収できるかについても検討してもらいました」



チームロックダウンの発表風景

今回の課題には、受講生全22名がA~Eの5班(A:

かるがも、B:バイセップス、C:ロックダウン、D:Single-S、E:金しゃち)に分かれ、各チーム30分の持ち時間でプレゼンテーションおよび質疑応答を競い合いました。全チーム発表の後、下代会長が登壇し、以下の要旨で挨拶しました。

「本年度の第12期マテハン塾が、本日無事に発表会と修了式を迎える事ができ、皆さんに感謝いたします。

私は自分の会社の入社式でもこの5年間、同じことを述べています。『皆さんいい会社、いい業界に入りましたね』という言葉です。スーパーマーケットの食品がいつもきちんと並んでいて商品が品切れにならない、医薬品や衣料品が日々着実に生産され、スマホからECで注文すれば翌日に届く、このように便利な社会を支えているのは私たちのマテハン業界であり、いまや社会で最も重要な業界だと自負しているからです。皆さんにも同じ言葉を贈りたいと思います。本日はおめでとうございました」



挨拶に立つJIMH下代会長



下代会長を囲んで出席した受講生との記念撮影

その後、厳正な採点・集計の結果、最優秀賞はチームロックダウンの5名(トーヨーカネツ:小野田氏、ホクショー:吉村氏、ダイフク:林氏、村田機械:和田氏・鈴木氏)に決定したと発表され、賞状の授与が行われ、当日の全プログラムが終了しました。

新入会員企業紹介

2022年12月以降当協会へ 新規入会された企業をご紹介します

【賛助会員】

株式会社コンフィグラ

マテハン機器業界の「販売・注文」プロセスに特化した営業支援プラットフォーム『CET』は、空間デザイン機能と自動コンフィグレーション機能を搭載。システム機器の提案業務に必要なデータを一元管理することで、手作業連携やミスの低減、ノウハウ伝承に効果を発揮します。



提案業務の短期化に役立つ『CET』

住所: 〒108-0075 東京都港区港南一丁目9番36号 アレア品川13階
電話番号: 03-5460-7525
公式サイト: <https://www.configura.com/ja/>

株式会社キーエンス

当社は1974年の設立以来、高品質なセンサーを提供することで工場の自動化を支援してきました。これからも、世の中になかった、新しい価値を創造することに挑み、商品を通じて製造・物流現場のお客様の課題を解決していきます。



物流コードリーダー SR-5000シリーズ

住所: 〒533-8555 大阪府大阪市東淀川区東中島1-3-14
電話番号: 06-6379-1111
公式サイト: <https://www.keyence.co.jp/>

『国際物流総合展2023 第3回 INNOVATION EXPO』主催

◆国際物流総合展2023 第3回 INNOVATION EXPO

- ・目的: 内外の最新物流機器・システム・情報等のソフトとハードを一堂に結集し、交易振興・技術の向上・情報の提供・人的交流等を促進する
- ・テーマ: 知恵と技術を結集し、2024年問題を解決する(仮)
- ・会期: 2023年9月13日(水)~15日(金) 10:00~17:00
- ・会場: 東京ビッグサイト「西1~2ホール+アトリウム」(19,760㎡)
- ・主催: (一社)日本産業機械工業会、(一社)日本産業車両協会、(一社)日本パレット協会、(一社)日本運搬車両協会、(一社)日本物流システム機器協会、(一社)日本能率協会、(公社)日本ロジスティクスシステム協会
- ・協賛: 関連40団体(予定)
- ・出展規模: 210社・団体/780ブース(第2回実績: 249社・団体/686ブース)
- ・公式HP: <https://www.logis-tech-tokyo.gr.jp/ie/>

2023国際ロボット展 併催企画「物流システム・ロボットゾーン」出展

◆2023国際ロボット展(iREX 2023)

- ・テーマ: ロボティクスがもたらす持続可能な社会
- ・会場: 東京ビッグサイト 東1~8ホール/西3・4ホール
- ・会期: 2023年11月29日(水)~12月2日(土)
- ・公式HP: <https://irex.nikkan.co.jp>

◆「物流システム・ロボットゾーン」

物流業界では人手不足を背景に、ロボット・IoTを活用したマテハン機器の進化による、省人化・標準化が進んでいます。成長著しい市場との相乗効果を発揮すべく、ゾーン出展します

- 仕分け装置・ソーター
- AGV・GTP・AMR
- 包装機器・システム
- 搬送機器・システム
- 情報機器・システム
- 各種周辺装置部品 他
- 保管・ピッキングシステム

・主催: (一社)日本物流システム機器協会・日刊工業新聞社

出展企業募集中

編集後記

- お蔭さまで第9号を発行することができました。事務局や編集チームの方々に深く感謝申し上げます。
- 3月13日から「マスクの着用は個人の判断」との考え方が政府から示されましたが、コロナ禍の3年間で否応なく習慣化された様子をそう簡単には変えられなさそうです。私もまだまだ外せずいます。
- 賀詞交歓会が3年ぶりに対面で開

催されたことやマテハン塾が修了式を迎えたことなど、協会の事業活動は2022年度の終盤の計画をつつがなく終えました(本誌の発行が年度末を予定している)。2023年度はアフターコロナを背景に協会活動がより活発になるように協力していきたいと思っています。(N)

一般社団法人 日本物流システム機器協会 広報誌「JIMH ニュース」第9号

2023年3月31日発行
〒104-0032 東京都中央区八丁堀3-3-2
スギコビル2階
TEL 03-6222-2001 FAX 03-6222-2005
<https://www.jimh.or.jp/>

